

采女城跡の植物



采女城跡保存会

はじめに

四季おりおりの風情を見せてくれている采女城跡の風景、その四季の移り変わりを眺めながら、ふと心の中に浮かんだのが自然の草花・樹木・野鳥の数々がどのように生息しているか興味深く浮かび上がり、いろいろな学習の参考になるのではと思い、今回の発刊となりました。

400年前の地形がそのまま残されている

わたしたちは、このウォッチングガイドブックが自然に親しむきっかけとなり、自然観察を楽しみながら、自然に学び、自然を守ることの大切さを理解していただければと願って編集しました。

このガイドブックは采女城跡の領域における自然植物に関する内容を図鑑形式にして解説しています。

自然とのふれあい

自然に触れるということは、大変なようで、あるいは一番やさしいことではないでしょうか。ただ、人々がそれを忘れているだけではないでしょうか。野外観察はしたいがどうも気が重いという声も聞かれます。その理由は「草や木の名前をよく知らない」からだといわれています。主な種類の名前ぐらいは知っておきたい、あるいは、教わる機会がほしいという声も聞かれます。

では、名前をたくさん知っていなければ野外観察が出来ないかというと、決してその様なことはありません。あまり気にせず外へ出て、少しでも物に接する工夫をしていくうちに、次第に名前が覚えられ、植物の名にも強くなっていくものではないでしょうか。やはり、その回数を多くすることしかないと思われれます。

平成 27 年 5 月 吉日

采女城跡保存会

会長 堀 保

目 次

1	采女城跡の植物調査方法	1
	(1) 植生の変遷	
	(2) 植物調査の方法とそのまとめ方	
2	采女城跡の植物分類表	2
3	采女城跡植生調査区域別図	5
4	調査区域別の植物分布	
	(1) 登り口から虎口<主な植物種名・概数・調査区域のようす>	6
	<主な植物分布図>	7
	(2) 五の郭と一の郭への通路<主な植物種名・概数・調査区域のようす>	8
	<主な植物分布図>	9
	(3) 一の郭<主な植物種名・概数・調査区域のようす>	10
	<主な植物分布図>	11
	(4) 二の郭・三の郭<主な植物種名・概数・調査区域のようす>	12
	<主な植物分布図>	13
	(5) 三の郭から四の郭、五の郭への帯郭<主な植物種名・概数・調査区域のようす>	14
	<主な植物分布図>	15
	(6) 八の郭と帯郭・虎口への通路<主な植物種名・概数・調査区域のようす>	16
	<主な植物分布図>	17
	(7) 九の郭(含西側外周)<主な植物種名・概数・調査区域のようす>	18
	<主な植物分布図>	19
	(8) 六の郭・七の郭<主な植物種名・概数・調査区域のようす>	20
	<主な植物分布図>	21
5	采女城跡の植物解説表(アイウエオ順)	22
6	自然観察のしかた	46

1. 采女城跡の植物調査方法

(1) 植生の変遷

采女城は伝承によれば 1260 年～1574 年にいたる間後藤氏が城を営み、1574 年織田信長の北伊勢侵攻により城を廃したと伝えられている。内部地区では、杖衝坂とともに大切な歴史遺産である。

城は泊丘陵の西南、内部川に臨む標高 61m の尾根上に営まれ、三つの尾根を利用し、九つの郭を持ち、堀切、空堀、土塁、虎口などが明瞭にのこる城跡である。

植生は廃城後、近隣農村の農用林、燃料採取林として毎年収奪が繰り返され、貧栄養化し、アカマツ、ネザサ林となっていたと思われる。昭和 30 年代に燃料革命がおこり、プロパンガスが多用され、堆肥に替わって化学肥料が用いられるようになると、農用林、燃料採取林としての有用性が減少し手入れがなおざりになり、林の荒廃が進んだ。加えてマツクイムシの被害により、城跡を含む北山一帯のアカマツ林は壊滅状態となった。その後この地方の自然植生である、クスノキ、タブノキ、アラカシ、ツブラジイ、ヒサカキ、カクレミノなどを主とした常緑広葉樹林が再生し今にいたっている。

(2) 植物調査の方法とそのまとめ方

①城跡の植物について科別の分類表を作成する。(地衣類、蘚苔類は除く)

- ・自然分類表・科名・種小名は、『牧野新日本植物図鑑』に準拠した。

②調査範囲

- ・登り口から五の郭までの山道沿いと、城山の周辺はそれぞれ通路から約 20m 幅、各郭については土塁の法先とする。
- ・登り口から五の郭までの山道沿いを No 1 とし、他は各郭を中心にして No 2～No 8 までの 8 区域に分ける。(P5 参照)

③調査方法

- ・調査区域の植物を、高木 (10m 以上)、亜高木 (7～10m)、低木 (7m 以下)、草本に区別して、目視で調査する。

該当する欄に、種名(木の名前)とおおよその本数を記録する。

調査区域内の植生のようす、特徴などを簡単に説明する。

- ・調査区域内の植物の分布図を作る。

各区域の地図上のおおよその位置に、下記の記号で記入する。

}	種名 (カタカナ)		}
	高木 ()	落葉樹 (オレンジ色)	
	亜高木 ()	常緑樹 (緑色)	
	低木 ()		
	草本 ()		

- ・全部の植物を記載すると煩雑になるときは適宜省略する。

④調査した主な植物について簡単な説明をつける。

2 采女城跡の植物分類表

種子植物門

<双子葉植物綱>

(離弁花亜綱)

- ・ どくだみ科 ードクダミ
- ・ せんりょう科 ーセンリョウ
- ・ かばのき科 ーイヌシデ、ハンノキ
- ・ ぶな科 ークリ、コナラ、アベマキ、ナラガシワ、アラカシ、ツブラジイ
- ・ うまのすずくさ科 ースズカカンアオイ
- ・ たで科 ースイバ、ギシギシ、イヌタデ、ボントクタデ、ミゾソバ、
 ママコノシリヌグイ、ミズヒキ
- ・ ひゆ科 ーイノコズチ、イヌビユ
- ・ なでしこ科 ーハコベ
- ・ もくれん科 ーサネカズラ
- ・ きんぼうげ科 ーキツネノボタン、センニンソウ
- ・ あけび科 ーミツバアケビ、アケビ
- ・ めぎ科 ーナンテン
- ・ つづらふじ科 ーアオツツラフジ
- ・ くすのき科 ークスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ、シロダモ
- ・ あぶらな科 ータネツケバナ、ナズナ
- ・ ばら科 ーアズキナシ、カナメモチ、フユイチゴ、ノイバラ、ヤマザクラ
- ・ まめ科 ーネムノキ、シロツメクサ、ノダフジ、カラスノエンドウ、
 アレチヌスビトハギ、カスマグサ
- ・ とうだいぐさ科 ーアカメガシワ
- ・ うるし科 ーヤマハゼ、ヤマウルシ、ヌルデ
- ・ もちのき科 ーモチノキ、クロガネモチ、ソヨゴ、ウメモドキ
- ・ かえで科 ータカオモミジ
- ・ ぶどう科 ーヤブガラシ、ノブドウ
- ・ つばき科 ーヤブツバキ、チャ、サカキ、ヒサカキ
- ・ うこぎ科 ーヤツデ、タカノツメ、カクレミノ
- ・ せり科 ーセリ
- ・ みずき科 ーアオキ

采女城跡の植物分類表

(合弁花匠網)

- ・ りょうぶ科 ーリョウブ
- ・ つつじ科 ーホツツジ、コバノミツバツツジ、ヤマツツジ、アセビ、ネジキ、
 シャシャンボ、ウスノキ
- ・ やぶこうじ科 ーヤブコウジ、マンリョウ
- ・ かきのき科 ーカキ
- ・ はいのき科 ークロバイ
- ・ えごのき科 ーエゴノキ
- ・ もくせい科 ーネズミモチ、ヒイラギ
- ・ くまつづら科 ークサギ
- ・ なす科 ーヒヨドリジョウゴ
- ・ ごまのはぐさ科 ーオオイヌノフグリ
- ・ おおばこ科 ーオオバコ
- ・ あかね科 ークチナシ、ヘクソカズラ、ヤエムグラ
- ・ すいかずら科 ーコバノガマズミ、スイカズラ
- ・ うり科 ースズメウリ、カラスウリ、アレチウリ
- ・ きく科 ーヒヨドリバナ、ヒメムカシヨモギ、アキノキリンソウ、
 セイタカアワダチソウ、コセンダングサ、ヨモギ、ノアザミ、
 コウヤボウキ、セイヨウタンポポ、ノゲシ、ヒメジョオン、
 ハルジョオン

<単子葉植物網>

- ・ いね科 ーマダケ、ハチク、ネザサ、カモジグサ、ササクサ、チジミザサ、
 エノコログサ、イヌビエ、ススキ、チガヤ
- ・ かやつりぐさ科 ーカヤツリグサ
- ・ ゆり科 ーショウジョウバカマ、オモト、ハラン、ヤブラン、ジャノヒゲ、
 サルトリイバラ
- ・ ひがんばん科 ースイセン、ヒガンバナ
- ・ やまのいも科 ーヤマノイモ
- ・ らん科 ーモジズリ、コ克蘭、シュンラン
- ・ まき科 ーイヌマキ
- ・ まつ科 ーアカマツ、クロマツ
- ・ すぎ科 ースギ
- ・ ひのき科 ーヒノキ

采女城跡の植物分類表

シダ植物門

<とくさ綱>

- ・ とくさ科 －スギナ

<シダ類綱>

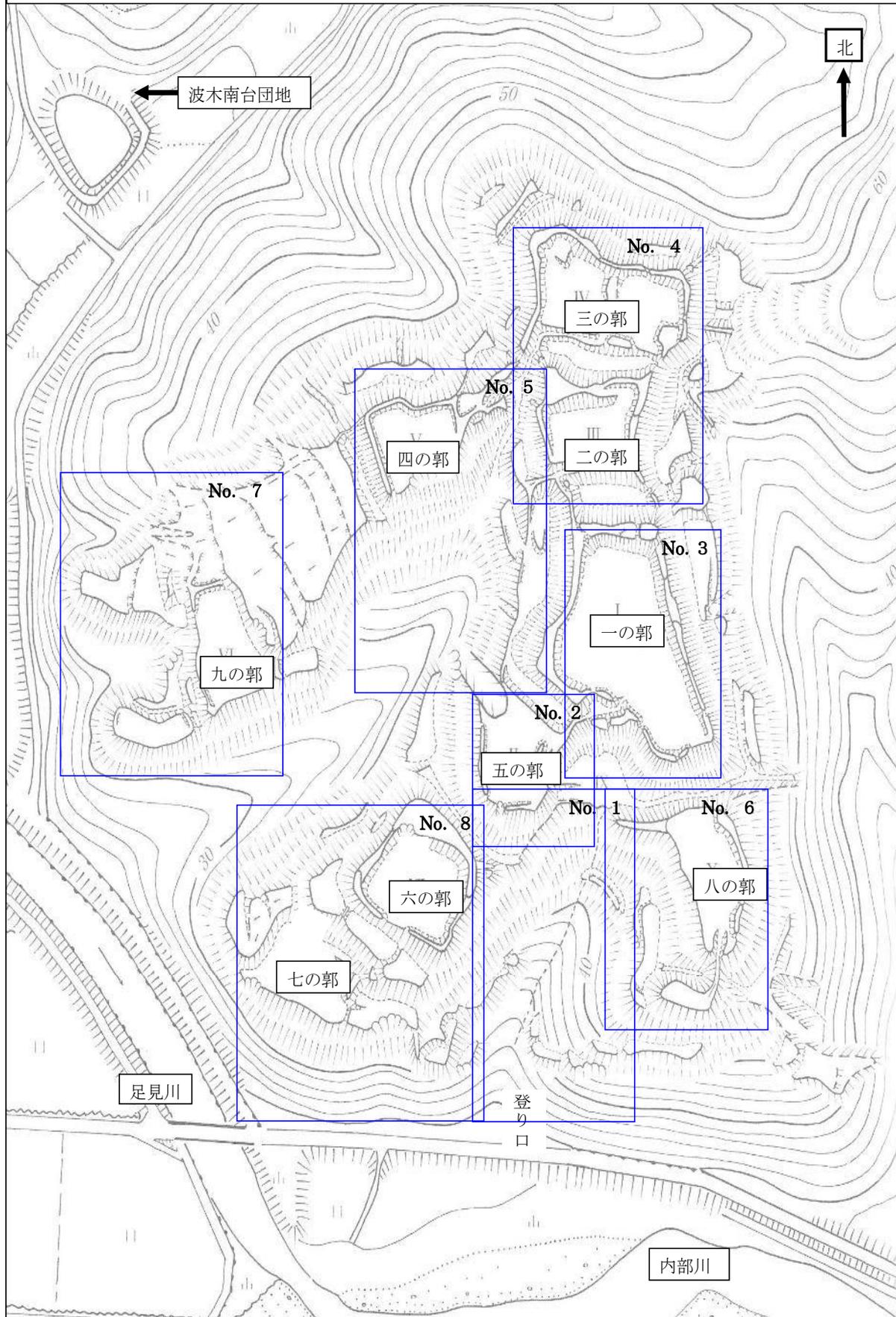
(ぜんまい亜綱)

- ・ ぜんまい科 －ゼンマイ

(薄囊した類亜綱)

- ・ かにくさ科 －カニクサ
- ・ うらじろ科 －ウラジロ、コシダ
- ・ きじのお科 －キジノオシダ、オオキジノオ
- ・ うらぼし科 －フモトシダ、ワラビ、オオカナワラビ、ベニシダ、ヒメワラビ、シケシダ、シシガシラ、ノキシノブ、マメヅタ

采女城跡植生調査区域別図



No. 1 調査区域：登り口から虎口（主な樹木名、概数、ようす）

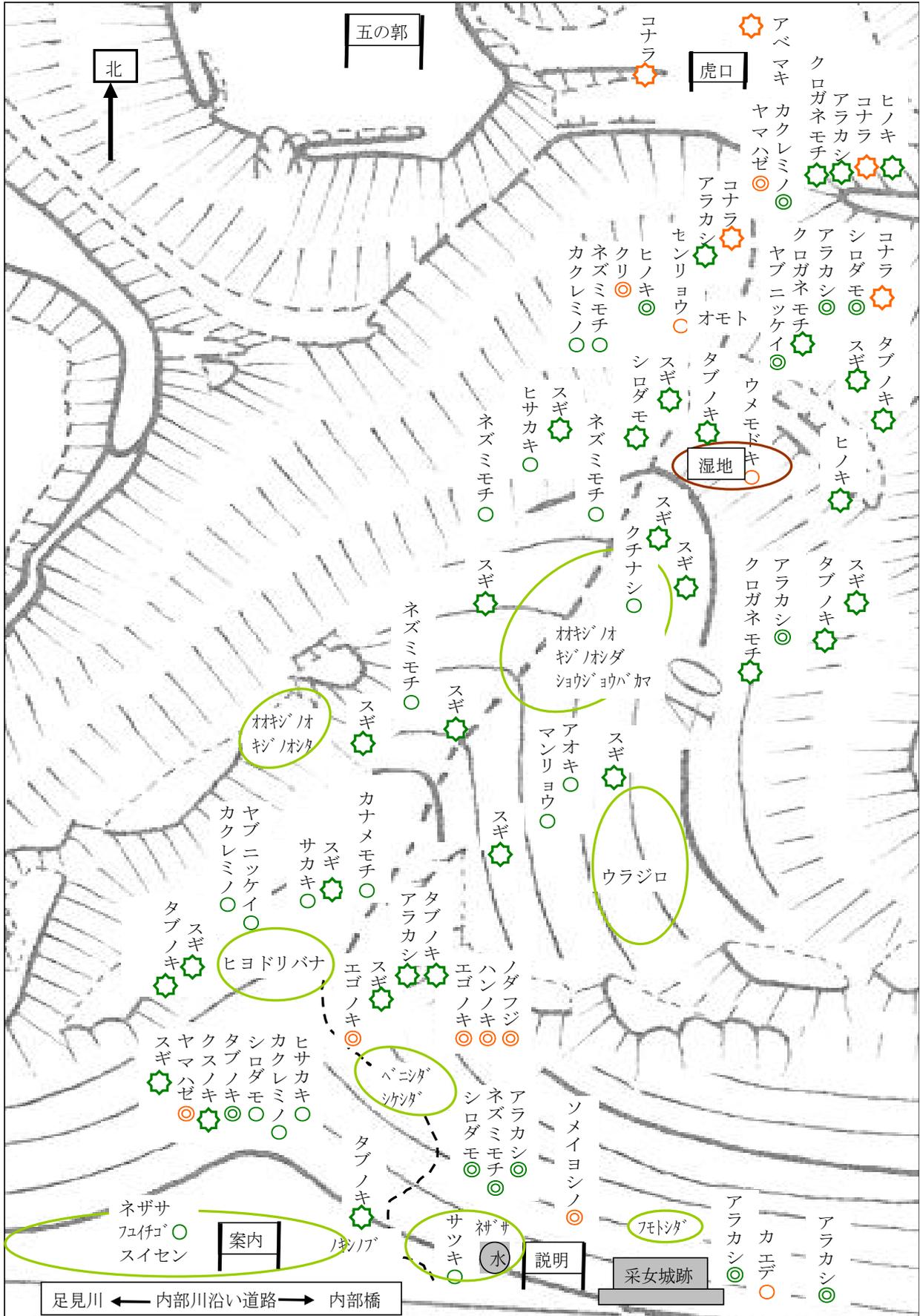
高木名・概数・ 	亜高木名・概数・ 	低木名・概数・ 	草本(含シダ)名・ 
アベマキ 1	アラカシ 25	アオキ 1	ウラジロ
アラカシ 15	エゴノキ 7	アラカシ 11	オモト
クスノキ 1	カクレミノ 11	ウメモドキ 1	オオキジノオ
クロガネモチ 3	クリ 1	カエデ 1	キジノオシダ
クロバイ 3	クロガネモチ 1	カクレミノ 7	ササクサ
コナラ 15	コナラ 2	カナメモチ 1	シケシダ
スギ 17	シロダモ 9	クスノキ 1	ショウジョウバカマ
タブノキ 13	スギ 4	クチナシ 3	ジャノヒゲ
ヒノキ 10	ソメイヨシノ 1	サカキ 1	チヂミザサ
	タブノキ 15	サツキ 1	ネザサ
	ネズミモチ 5	シロダモ 2	ノキシノブ
	ハンノキ 1	センリョウ 1	ヒヨドリバナ
	ヒノキ 6	タブノキ 5	フモトシダ
	ヤブニッケイ 5	ネズミモチ 16	フユイチゴ
	ヤマハゼ 6	ノダフジ 16	ベニシダ
		ヒサカキ 38	ヤブラン
		ヒノキ 4	
		マンリョウ 3	
		モチノキ 1	
		ヤツデ 1	
		ヤブニッケイ 8	

調査区域のようす

登り口の横に二抱えもあるタブノキがあり、その近くにアラカシ、タブノキ、カクレミノ、ネズミモチなど常緑樹が葉を茂らせている。その上の空き地はヒヨドリバナと背の低いネザサが茂っている。ここは2mを超すネザサの藪になっていたが、伐開した後にヒヨドリバナが生えてネザサとヒヨドリバナの草原になった。坂の途中に湿地があり、周りの胸高直径30～40cmのスギ林（30数本）は土地の境界に植えられたと言われるが、自生のものもある。林床にはネザサに混じってシダ植物が多い。この谷筋は、冬の季節風の影響が少ないので、生えている木は常緑広葉樹が優先している。「虎口」まで登ると、コナラ、アベマキなど落葉樹が混じり、ヒノキも見受けられる。



No. 1 調査区域：登り口から虎口



No. 2 調査区域：五の郭と一の郭への通路
(主な樹木名、概数、ようす)

高木名・概数・ 	亜高木名・概数・ 	低木名・概数・ 	草本(含シダ)名・ 
アラカシ 1 1	アラカシ 5	カクレミノ 1	
クスノキ 2	エゴノキ 5	コナラ 3	
クロガネモチ 1	カクレミノ 3	クロバイ 2	
クロバイ 1	クロバイ 4	シャシャンボ 1	
コナラ 1 0	コナラ 7	タブノキ 1	
スギ 2	シャシャンボ 8	ネジキ 1	
タブノキ 2	タブノキ 4	ヒサカキ 7	
ヒノキ 1 1	ヒサカキ 3 2	マンリョウ 1	
ヤマザクラ 4	ヒノキ 7	ヤブニッケイ 5	
	ヤブニッケイ 9		
	ヤマザクラ 2		
	ヤマハゼ 5		
	リョウブ 1		

調査区域のようす

主郭とされる一の郭と空堀を隔てて一段下にあるこの郭は、胸高直径70cmのヤマザクラが目立つ。ヒノキ、シャシャンボが沢山あるがエゴノキ、クスノキ、ヤマハゼなどもあり、このあたりは普通の「里山」の植生といえる。



No. 3 調査区域：一の郭 (主な樹木名、概数、ようす)

高木名・概数・☆	亜高木名・概数・◎	低木名・概数・○	草本(含シダ)名・○
アラカシ 13	アラカシ 9	アセビ 10	ウラジロ 群生
クロガネモチ 2	エゴノキ 3	カクレミノ 4	ネザサ 群生
コナラ 36	カクレミノ 16	クロバイ 1	
スギ 1	クリ 1	サカキ 1	
タブノキ 5	クロバイ 2	シャシャンボ 1	
ナラガシワ 1	コナラ 12	チャ 1	
ヒノキ 11	シャシャンボ 2	ネズミモチ 2	
ヤマザクラ 5	スギ 1	ノダフジ 2	
	タブノキ 4	ヒサカキ 14	
	ネズミモチ 2	ヒノキ 6	
	ヒサカキ 12	ヤマツツジ 20	
	ヒノキ 3	マンリョウ 2	
	ヤマザクラ 1		
	ヤマハゼ 6		

調査区域のようす

長径60m、幅40mのほぼ台形の郭で、形のはっきりした土塁を巡らせていて、素掘りの井戸がある。采女城の主郭とされているこの郭も、手入れをする前は、ネザサの藪に覆われていたので、藪を除去すると疎林になった。コナラを主に、アラカシ、ヤマザクラ、カクレミノ、クロバイ、ヤマハゼ、ヒノキ、ヒサカキなどこのあたりに普通にある林である。

井戸について、古老の話では石を投げこむと水音がしたと言うが今は落ち葉でうずもれて7~8mの深さになっている。また1574年の織田信長の北伊勢侵攻により落城したと伝えられる後藤氏の悲劇伝承に登場する「千奈美姫」はこの井戸に身を投げたと伝えられている。



No. 4 調査区域：二の郭・三の郭 (主な樹木名、概数、ようす)

高木名・概数・ 	亜高木名・概数・◎	低木名・概数・○	草本(含シダ)名・ 
アラカシ 18	アラカシ 18	アオキ 3	ケネザサ 群落
イヌシデ 1	エゴノキ 1	アセビ 2	スイカズラ 1
クロガネモチ 1	カクレミノ 16	アラカシ 10	テイカカズラ 1
コナラ 30	クロバイ 2	カキ 1	ネザサ 群生
タブノキ 5	コナラ 16	カクレミノ 3	ベニシダ
ヒノキ 18	シャシャンボ 3	クロバイ 3	ヒメワラビ
ヤマザクラ 2	ソヨゴ 2	コナラ 5	
	タブノキ 8	タブノキ 2	
	ネズミモチ 3	チャ 10	
	ネムノキ 1	ネズミモチ 1	
	ヒサカキ 14	ノダフジ 2	
	ヤブニッケイ 4	ヒイラギ 1	
	ヤマザクラ 1	ヒサカキ 67	
	ヤマハゼ 7	マンリョウ 2	
	リョウブ 3	ヤマツツジ 10	
		ヤマハゼ 1	
		リョウブ 15	

調査区域のようす

一の郭から北へそれぞれ空堀をへだてて二の郭、三の郭と続く。何れも背丈を越すネザサの藪になっていて足の踏み入れようもなかったが、藪を除去すると立木は殆んどなかった。二の郭は立木が無く、ネザサとヒメワラビだけの広場になり、三の郭は疎林となっている。土塁は北側に明瞭に残っている。冬の北風の影響で、コナラ、リョウブ、ネジキ、ヤマザクラなど落葉樹の割合が大きい。



No. 5 調査区域：三の郭から四の郭、五の郭への帯郭
(主な樹木名、概数、ようす)

高木名・概数・ 	亜高木名・概数・ 	低木名・概数・ 	草本(含シダ)名 
アベマキ 2	アカマツ 1	アカマツ 1	ウラジロ 群生
アラカシ 20	アラカシ 18	アセビ 21	オオカナワラビ
クロガネモチ 4	カクレミノ 17	カクレミノ 16	コシダ 群生
クロバイ 1	カナメモチ 2	カナメモチ 1	ネザサ 群生
コナラ 12	クリ 1	コウヤボウキ 1	ベニシダ
スギ 8	クロガネモチ 3	コバノガマズミ 1	ヤブコウジ
タブノキ 8	クロバイ 2	サカキ 1	
ツブラジイ 18	コナラ 17	ソヨゴ 1	
ヒノキ 8	サカキ 2	チャ 14	
	シャシャンボ 5	ツブラジイ 2	
	シロダモ 2	ネジキ 2	
	スギ 6	ネズミモチ 3	
	ソヨゴ 3	ノダフジ 1	
	タブノキ 8	ヒイラギ 1	
	ネジキ 12	ヒサカキ 22	
	ヒサカキ 45	ホツツジ 1	
	ヒノキ 4	モチノキ 1	
	ヤブニッケイ 9	ヤブツバキ 1	
	ヤマザクラ 4	ヤブニッケイ 3	
	ヤマウルシ 1	ヤマウルシ 1	
	ヤマハゼ 13	ヤマツツジ 1	
	リョウブ 7	ヤマハゼ 3	
		リョウブ 11	

調査区域のようす

北西に張り出した郭で北側に帯郭が付いている。西は高い土塁の下に空堀があり、緩い傾斜の先に九の郭がある。土塁は北と西に明瞭に残る。郭はリョウブ、ネジキ、コナラ、ホツツジ、コバノガマズミ、ヤマザクラなど落葉樹が多く明るい林である。やはり冬の季節風の影響で落葉樹が多いのだろう。南の谷にはツブラジイの林があり、何れも直径30～60cmの大木である。また、一、二の郭の下を通過して五の郭へ上る帯郭が作られている。



調査区域別の植物分布

No. 6 調査区域：八の郭・帯郭・虎口への通路
(主な樹木名、概数・ようす)

高木名・概数・☼	亜高木名・概数・◎	低木名・概数・○	草本(含シダ)名・○
アラカシ 1	アカマツ 1	アオキ 1	ウラジロ
クロガネモチ 3	アズキナシ 1	アセビ 10	コシダ
クロバイ 3	アラカシ 6	ウスノキ 8	サルトリイバラ
コナラ 5	エゴノキ 5	カキ 5	シシガシラ
タブノキ 1	カクレミノ 12	カクレミノ 13	ネザサ
ヒノキ 3	カナメモチ 3	クリ 2	ヤブコウジ
	クロガネモチ 5	クロバイ 1	
	クロバイ 6	コウヤボウキ 1	
	コナラ 13	コバノガマズミ 5	
	サカキ 2	サカキ 2	
	シャシャンボ 3	シロダモ 1	
	ソヨゴ 3	ソヨゴ 1	
	タブノキ 5	タカノツメ 1	
	ネジキ 10	タブノキ 1	
	ネズミモチ 5	チャ 5	
	ヒサカキ 2	ネジキ 5	
	ヒノキ 6	ネズミモチ 9	
	ヤブニッケイ 1	ヒサカキ 16	
	ヤマザクラ 1	ヒノキ 5	
	ヤマハゼ 10	マンリョウ 4	
	リョウブ 2	ヤマウルシ 5	
		ヤマツツジ 群落	

調査区域のようす

一の郭と堀切を挟んで八の郭がある。堀切で隔てられている独立性の高い郭で、東と西に不明瞭な土塁が残っている。東南に開けた展望を持つ郭で、采女町、河原田町、楠町が一望できる。良く晴れた日には伊勢湾や対岸の知多半島が遠望できる。

郭内の植生は、ヒノキ、ソヨゴ、コナラ、サカキ、コバノガマズミ、ネジキ、ヒサカキなどで、林床にはネザサ、ヤマツツジがあり、東の法面にはコシダが群生している。



No. 7 調査区域：九の郭 (主な樹木名、概数、ようす)

高木名・概数・ 	亜高木名・概数・ 	低木名・概数・ 	草本(含シダ)名 
アベマキ 1	アカシデ 1	アカメガシワ 1	アオツヅラフジ
コナラ 2	アベマキ 3	アセビ 8	セイタカアワダチソウ
スギ 3	アラカシ 6	アベマキ 1 2	ウラジロ
ヒノキ 2	イヌシデ 1	アラカシ 7	クズ
ヤマザクラ 2	カクレミノ 2	ウスノキ 1	コシダ
タブノキ 1	クリ 1	カクレミノ 2	ススキ
	コナラ 5	クサギ 1	ネザサ
	シャシャンボ 1	コウヤボウキ 2	ベニシダ
	スギ 2	コバノガマズミ 1	ヤブソテツ
	ネズミモチ 1	コバノミツバツツジ 2 0	ヨモギ
	ヒノキ 3	サカキ 1	
	ヤマザクラ 1	サルトリイバラ 1 0	
	ヤマハゼ 1	シャシャンボ 1	
	リョウブ 6	スイカズラ 3	
		テイカカズラ 1	
		ヌルデ 1	
		ネズミモチ 2	
		ネムノキ 1	
		ノイバラ 3	
		ノダフジ 5	
		ノブドウ 1	
		ヒイラギ 1	
		ヒサカキ 1 0	
		ヒノキ 1	
		フユイチゴ 1	
		ミツバアケビ 1	
		ヤマウルシ 1	
		ヤマザクラ 1	
		ヤマツツジ 5	
		ヤマハゼ 1	
		リョウブ 2	

調査区域のようす

四の郭の下、城山の麓に近いところにある郭で、11基の五輪塔、1基の宝篋印塔があるが城跡との関係は不明である。郭の中はネザサの藪になっていて周囲は人の干渉が無いのでブッシュになっている。コナラ、リョウブ、コバノミツバツツジ、アベマキ、など、落葉樹の割合が高く冬季はあかるい林である。城山の麓はアラカシ、タブノキ、リョウブ、ヒノキ、スギなどが茂りその外側をマント群落、ソデ群落が取り巻いている。



No. 8 調査区域：六の郭・七の郭 (主な樹木名、概数、ようす)

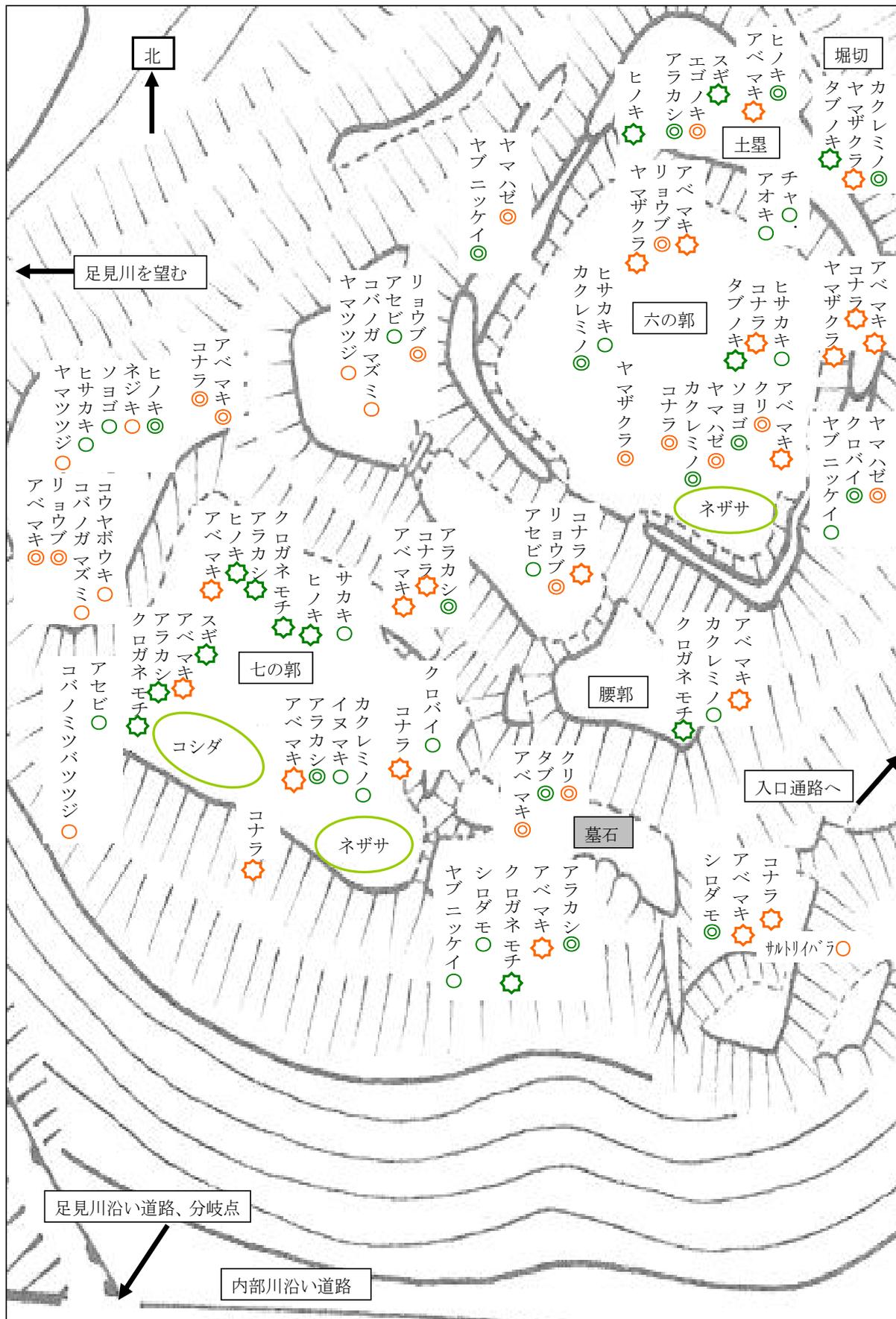
高木名・概数・ 	亜高木名・概数・ 	低木名・概数・ 	草本(含シダ)名・ 
アベマキ 17	アベマキ 20	アオキ 2	ネザサ 群生
アラカシ 8	アラカシ 3	アセビ 13	コシダ 群生
クロガネモチ 4	エゴノキ 3	アベマキ 1	ベニシダ 3
コナラ 15	カクレミノ 9	アラカシ 5	
スギ 5	クリ 2	イヌマキ 1	
タブノキ 2	クロバイ 1	カクレミノ 9	
ヒノキ 5	コナラ 9	クロバイ 1	
ヤマザクラ 1	シロダモ 2	コウヤボウキ 5	
	ソヨゴ 1	コナラ 1	
	タブノキ 5	コバノガマズミ 3	
	ヒノキ 13	コバノミツバツツジ 3	
	ヤブニッケイ 1	サカキ 1	
	ヤマザクラ 3	サルトリイバラ 5	
	ヤマハゼ 3	シロダモ 1	
	リョウブ 6	ソヨゴ 1	
		タブノキ 1	
		チャ 5	
		ネジキ 1	
		ヒサカキ 26	
		ヒノキ 5	
		ヤブニッケイ 2	
		ヤマツツジ 15	
		リョウブ 1	

調査区域のようす

城跡の西南に延びる尾根の先端にある郭で、内部川、足見川に臨むところは崖になっていて山裾はマダケの藪になっている。六、七の郭を含み周辺にはアベマキの林が目立ち、胸高直径25～50cmくらいの木が沢山ある。六の郭は低い土塁が残っていて郭内はネザサの藪になっている。七の郭はアベマキが優先していてクロバイ、カクレミノ、ヤマツツジ、コバノガマズミなどが少しある。



No. 8 調査区域：六の郭・七の郭



アオキ（青木） みずき科 *Aucuba japonica*
 城跡の登り口の直ぐ上に幼木が2本、西の谷や空堀に成木がある。常緑低木で枝も葉も濃い緑色である。葉には艶があり荒い鋸歯（きょし：葉の縁がギザギザ）があって長さ8～17cmくらい。春、穂状のえび茶色の小花が咲き、楕円形の実は赤く熟す。赤い実と緑の葉のコントラストが美しいので、庭木として植えられる。アオキの葉はカモシカの好物である。



アオツツラフジ（かみえび） つづらふじ科 *Sinomenium Diversifolium*
 林の縁にネザサやススキの上に覆いかぶさるようにツルを伸ばすツル植物で、クズなどととも風や光をさえぎって林の乾燥を防ぐ役割をしている。ツルは8mmくらいの太さになり灰白色で他の木に巻きついて長く伸びる。葉は卵形で1～3cmの柄がある。6月に白い小さな花が咲き、白く粉を吹いたような藍色の実をつける。



アカマツ（めまつ） まつ科 *Pinus Densiflora*
 昭和30年代まで城跡を含む北山一帯はアカマツ林であった。農家の大事な燃料として利用されたが需要が減ったので山の手入れもされなくなった。加えてマツクイムシの被害でほぼ全滅状態になり、今は城山の北西の山裾に直径20cmくらいのマツが僅かに残っている。アカマツは木肌が赤褐色であることと、クロマツより葉が柔らかいので「めまつ」と呼ばれる。



アカメガシワ（ごさいば） とうだいぐさ科 *Mailotus Japonicus*
 内部川に面した山裾にある。幹や枝は明るい褐色で、成長が早い。葉は長い柄があり円形で縁に2～3の浅い切れ込みがある。若葉には赤い毛がびっしりと生えて赤く見えるのでアカメガシワと呼ばれるのであろう。6月に枝先に褐色の毛におおわれた房状の花をつける。葉が大きいので昔、食べ物を載せたところから「さいもりば」または「ごさいば」とも呼ばれる。



アズキナシ 小豆梨（はかりのめ） ばら科 Sorbus
alnifolia

八の郭の下にある。根元から枝分かれして直径は20cmくらい、木肌は赤みを帯びた黒灰色、短枝の先に葉や花をつける。5～6月頃に白い小さな花をつけ、秋に小豆粒くらいの実をつけ赤く熟す。葉は秋に黄葉して落ちるが実はまだ残り、たいていは鳥に食べられる。アズキナシは実が小豆くらいの大きさなのでアズキナシといわれ、「はかりのめ」は肌に白点があるからである。



アセビ（あせぼ） つつじ科 Pieris Japonica

一の郭に1.5mくらいの木が数本ある。常緑の低木で幹は枝別れが多い。肌は灰褐色で縦にひび割れがある。葉は柄があり5cmくらいで表面に艶があり縁に細かい鋸歯がある。早春に白い壺型の花が咲く。気が早くて蕾は前年の秋にできる。木全体に毒があり、鹿も食べない。昔シラミが湧くとこの葉を煎じて髪を洗った。



アベマキ（わたくぬぎ） ぶな科 Quercus variabilis

六、七の郭およびその周辺に多い落葉高木で太さは50cmを超える。樹皮は厚くて弾力のある厚いコルク質である。新緑の頃は明るい萌葱色に輝いて見える。4月頃枝先に房状の雄花と枝の先端に2、3個の雌花をつける。ドングリは大きな樽型で、お椀の鱗片は長く伸びてモジャモジャしている。受粉したドングリは翌年の秋に実る。



アラカシ（粗櫨） ぶな科 Quercus glauca

城跡全体に多い常緑高木で、幹は直径40cmを超えるものもあり、木肌は青味を帯びた灰～灰黒色で小さいひび割れがあり、ごつごつしている。葉は固くて艶があり先の方に荒い鋸歯がある。春、新枝のつけ根に5～10cmくらいの房になった雄花がつき、枝先に2、3個の雌花をつける。花粉は風で運ばれ、ドングリはその年の秋に実る。



イヌシデ（しろしで）かばのき科 *Carpinus Tschonoskii*
 三の郭にある。木肌は灰色で灰黒色の縞がある。直径 20 cm くらい、高さは 10m を超える。新枝に葉や花がつく。葉には鋸歯があり、葉脈が目立つ。花は房のように垂れ下がり葉が伸びる前に咲く。秋には黄葉する。「しろしで」は新芽の時、葉に白い毛があるからである。



イヌマキ まき科 *Podocarpus macrophylla*
 七の郭に幼木が 1 本ある。暖かい地方に生える木で大木になり、木肌は灰白色で縦縞があり小さくはがれて落ちる。葉は常緑で細長く艶があり真ん中の葉脈がはっきりしている。雌雄別の樹で雄花は 5 月ごろ枝先の葉のつけ根に房のようにつく。雌花も葉のつけ根につき、小さな柄があって緑色の花托があり、秋に赤く熟し食べられる。生垣などに仕立てられる。



ウスノキ（かくみのすのき）つつじ科 *Vaccinium hirtum*
 八の郭にある。葉の落ちる低木で、大きくなっても 1m くらいで細かく枝分かれする。5～6 月頃枝先に小さな花をつけ秋には赤く熟し食べられる。ウスノキとは実が六角で先が窪んでいる所から臼に見立てたもので、「かくみのすのき」も同じ発想であろう。酸っぱいが食べられる。



ウメモドキ もちのき科 *Ilex serrate*
 虎口下の山道の湿地に倒れたまま枝を伸ばしている。落葉低木で、湿った所が好きである。成長しても 3～4 m 程度で細かく枝分かれする。木肌は灰色で株立ちすることもある。葉は互生で柄のある 4～7 cm の葉が枝先につく。6 月に葉のつけ根に小さな薄紫の花がかたまって咲き、実は直径 5 mm くらいで秋から冬にかけて赤くなり、葉が落ちても赤い実が残り美しいので庭に植えられる。



ウラジロ （裏白） うらじろ科 *Gleichenia glauca*

五の郭や帯郭に群生する常緑のシダ植物で、地下茎を伸ばして広がり所どころから濃い茶色の葉柄を立ち上げ、先から2枚の羽状複葉を拡げる。2枚の葉の間に丸く巻いた来年の芽がついている。この葉と芽を使っておもちゃの「猿弾き」を作る。「裏白」は葉の裏が白いからであり、正月の飾りに使う。



エゴノキ （ろくろぎ、ちしゃのき） えごのき科 *Styrax Japonica*

登り口の上に直径15cmくらいの樹があり、他の郭でも見受けられる。落葉亜高木で木肌は黒褐色、表面に細かなしわがある。葉は柄があり互生、小さな鋸歯がある。5月に長い柄のある星形の白い花が咲き花後1~2cmの緑色の実がなる。毒があるので魚取りに使った。「ろくろぎ」は材を傘のロクロに使ったからである。



オオイヌノフグリ ごまのはぐさ科 *Veronica Persica*

早春の頃、道端で普通に見かける帰化植物で、茎は分枝して広がり、葉は互生、卵形でにぶい鋸歯がある。葉のつけ根から長い柄のある空色の花が咲く。イヌノフグリという草は日本在来種であったが、オオイヌノフグリに負けてしまった。



オオキジノオ きじのお科 *Plagiogyria euphlebia*

山道のスギ林の下草として、キジノオシダと混生している常緑のシダである。両方ともよく似ているが、オオキジノオは下の方の葉に短い柄があり、先の方の葉は中軸とつながっている。初夏に株の中心から「孢子葉」が伸びる。シダ植物は花が咲かないので、孢子で繁殖する。



<p>オモト（万年青） ゆり科 <i>Rohdea japonica</i></p> <p>光が十分に入らない林下でも育つ常緑の草本で、太い地下茎があり、幅のある厚い葉が束になって出る。葉の長さは30～40cmにもなる。真ん中から太い花茎が伸びて、穂状の花が咲く。直径1～2cmの実赤く熟し、緑の葉と赤い実が美しいので庭の下の草として植えられる。</p>	
<p>カキ かきのき科 <i>Diospyros Kaki</i></p> <p>八の郭に幼木がある。種を鳥が運んだものか、人が捨てたものかわからない。落葉高木で大木になる。野生の柿は「山柿」といい、実が小さくて渋い。栽培品種は甘いものと、渋いものがある。秋深くなって葉が落ちてても熟した実は冬まで残り、初冬の風物詩になり、鳥のエサになる。渋柿から「カキシブ」を採り染料や防腐剤にした。</p>	
<p>カクレミノ（隠れ蓑） うこぎ科 <i>Gilibertia trifida</i></p> <p>城跡に多い常緑の亜高木で成長は早い。幹は灰色、木肌は滑らかである。葉は長い柄のある手のひら大の大きな葉で、幼木のときは先が3つに分かれるが、成木になると卵型になり、時には3つに分かれるものと2つに分かれるものが混じる。6～7月、新枝の先に淡緑色の小花を多数つける。8mmくらいの実黒く熟す。カクレミノは葉の形から名づけられたので、子どもたちには「ゲー、チョコキ、パーの木」の方がわかりやすい。</p>	
<p>カスマグサ まめ科 <i>Vicia tetrasperma</i></p> <p>道端や土手に普通にある草で、カラスノエンドウに似ているが小さい。スズメノエンドウより大きく、カラスとスズメの間ということでカスマ草という。草の形はカラスノエンドウに似ているが、実は鞘のなかに4粒入っている。</p>	

カナメモチ （あかめもち）ばら科 *Photinia glabra*

山道や五の郭にあるが本数は多くない。常緑の亜高木で幹は灰褐色、葉は短い柄があり互生、表面に艶があり縁に鋸歯がある。5～6月ころ枝先に白い小花が群がって咲く。実は秋になると赤く熟す。新芽が赤いので「あかめもち」という。



カラスノエンドウ （やはずえんどう）まめ科 *Vicia sativa*

山裾や道端にある越年生の草で茎は根元から枝分かれして40cmくらいの高さになる。葉は互生し偶数羽状複葉、先が伸びてまきひげになる。4～5月に葉のつけ根にピンク色の蝶型の花が咲く。実は鞘に8～10個くらい入っている。ピーピー豆といって鞘を吹いて遊ぶ。



キジノオシダ きじのお科 *Plagiogyria adnata*

スギ林の下草としてオオキジノオと混じっていることが多い。見分けるには、中軸と羽のつき方をよく見るとキジノオシダは軸につながっていて、オオキジノオは短い柄がある。両方とも孢子葉は別に高く伸び、葉の幅は狭い。



クサギ くまつづら科 *Clerodendron trichotomun*

林縁や伐採後の空き地にいち早く生える落葉低木で、葉は対生、独特の匂いがある。クサギと呼ばれる所以である。城跡にもあるが多くはない。花は8月ごろ咲き、独特の匂いがする。花後、藍色の実をつけ赤い萼とのコントラストが美しい。若葉は食べられる。火を通すと匂いは消える。



クスノキ くすのき科 *Cinnamomum Camphora*

照葉樹林の主要構成員であるがなぜか城跡には少ない。入口の上に直径40cmくらいのが1本ある。大木になる常緑樹で肌は茶色がかった灰色、細かいひび割れがある。葉は柄をいれて8cmくらいで艶があって側脈が目立つ。6月に小さなえび茶色の花が咲き秋に黒い実になる。よい香りがし防虫剤のショウノウを採った。



クチナシ あかね科 *Gardenia Jasminoides*

いくつかの郭にあるが数は少ない。常緑の低木で幹は灰色、葉は対生、艶があり長さ10cmくらい。夏に白い6~7cmの花が咲きよい香りがする。実は熟すと、黄赤色で、3cmくらいの楕円形、6つの稜があり先に6本の萼の跡が残る。染料や薬にもする。クチナシとは実が熟しても口が開かないからという。



クリ ぶな科 *Castanea crenata*

クリの木は少なく、立ち枯れの木を何本か見受けるから競争に負けて枯れるのかもしれない。幹は灰色、縦に裂け目がある。葉は柄があり互生、長さは10~15cm、縁に針のように尖った鋸歯がある。6月に新枝の基に15cmくらいの房状の雄花をつけ強においがする。実はイガに包まれ2~3個が入っている。実が大きくて渋抜きをせずに食べられるので、昔から大切な食料とされ、材も良質の建築材であった。



クロガネモチ もちのき科 *Ilex rotunda*

山道に直径60cmくらいの大木があり他の郭にも数本の木がある。常緑の高木で、幹は灰白色、ごつごつした感じである。互生の葉は黒紫の短い柄があり表面は艶があり鋸歯は無い。5月頃枝先に、柄のある薄紫の小花がかたまって咲き、秋に枝一杯に赤い実がなって美しいので庭木として植えられる。雌雄別の株である。小枝、葉柄の色から名づけられたと思われる。



クロバイ（そめしば）はいのき科 *Symplocos prunifolia*

城跡に多い常緑亜高木で幹は黒褐色、白い斑点がある。柄のある葉は互生、長さは5~7 cmと小さく光沢があり縁に小さい鋸歯がある。5月頃枝先に白い小花が沢山咲き遠くから見ると梢全体がまっ白に見える。焼いた灰を草木染の媒染剤に使うところから「灰の木」とも呼ぶ。



コウヤボウキ きく科 *Pertya ovata*

三、四の郭にあるが数は少ない。日当たりのよい乾いた疎林に生える草のような落葉低木である。高さは50~60 cm、よく枝分かれし葉は互生で卵型、先が尖り小さな鋸歯がる。秋に汚れたような白色の頭花をつける。コウヤボウキの名は高野山ではこの枝を束ねて箒に使ったところからこの名がついたという。



コクラン らん科 *Liparis nervosa*

薄暗い林床のシダの陰などにひっそりと咲く地味なラン科植物である。茎は肥厚して緑色、高さ10 cmまで2~3枚の葉がつく。5月頃茎の先から花茎を伸ばし黒い小さな花を4~6個つける。花の色が黒いのでコクランと呼ばれる。



コシダ うらじろ科 *Gleichenia Dichotoma*

日当たりのよい乾燥気味の所が好きなシダで人の郭に群生している。常緑のシダで、地下茎が横に這い、葉柄が所どころから立ち上がり先は2つに分かれそれぞれに1対の葉が出る。葉は分れるところからも出るから都合6枚の葉が出ることになる。繁殖力が旺盛で山の斜面がコシダ群落でおおわれる所もある。



<p>コナラ （ははそ、なら） ぶな科 <i>Quercus serrata</i></p> <p>城跡の落葉広葉樹の代表のようにどこにでもあり、直径も60cmに達する木がある。幹は灰白色、縦にひび割れがあり高さは15mを越すものもある。葉は互生で短い柄がある。3月頃の若葉は両面に白毛があり、コナラ林は銀鼠色に煙って見える。この頃新枝のつけ根に房状の雄花が付き、雌花は葉腋から枝を出して2、3個の雌花をつける。ドングリは秋に実る。</p>	
<p>コバノガマズミ すいかずら科 <i>Viburnum erosum</i></p> <p>多くはないが幾つかの郭の日当たりのよい疎林にある落葉低木である。幹は灰色、高さは1～2mで小枝に細毛がある。葉は対生、短い柄があり長さは4～8cmくらい長い卵型、先は尖る。初夏に白い小花が集まって咲く。花後に6～7mmの実がなり、赤く熟す。食べると酸っぱい。</p>	
<p>コバノミツバツツジ つつじ科 <i>Rhododendron reticulatum</i></p> <p>城山の北西の斜面に多い。落葉低木で幹や枝は灰褐色、肌は滑らかでよく枝分かれする。葉は枝先に3枚つく。卵型で先はとがる。早春、葉の出る前に紅紫色の3cmくらいの花が2～3個集まって咲く。花弁は先が5つに分かれ雄蕊は10本雌蕊は1本である。ミツバツツジより葉が小さいからコバノミツバツツジという。</p>	
<p>サカキ つばき科 <i>Cleyera ochracea</i></p> <p>多くはないが幾つかの郭にある常緑亜高木で直径13cmくらいになり高さ8m内外、肌は黒褐色で滑らかである。葉は厚くて長楕円形で先がとがり柄がある。6月に2cmくらいの星形の白い花が咲き実は黒く熟す。サカキは神道の儀式に使われるので神社の境内には必ずと言ってもよいくらい植えられている。「榊」は国字で音読みはない。</p>	

サネカズラ（びなんかずら）もくれん科 *Kadsura Japonica*

城跡の林縁植物群落の一員である。常緑のツル植物で、ツルは2 cmくらいの太さになり褐色で柔らかい。葉は互生で柄があり厚くて艶がある。初夏の頃薄黄色の2 cm足らずの花が咲き花には長い柄がある。雌雄別の木である。実は赤く熟し粘液があるので、古代、整髪料として使われたところから「美男蔓」という。



サルトリイバラ（かから） ゆり科 *Smilax China*

林の周りや疎林の中で他の木に巻きつく、低木のツル植物で、ツルに鋭い棘があるので嫌われる。葉は互生して丸く、若葉で「イバラモチ」を作る。初夏の新葉の出るころ、葉のつけ根から薄黄色の花がかたまって咲く。花後に7 mmくらいの実がなり赤く熟す。この実は葉が落ちてからも残り初冬の日に映えて美しい。棘が鋭く猿が引っかかるというのでサルトリイバラという。



シシガシラ うらぼし科 *Blechnum niponicum*

城跡にたまにある常緑のシダ植物。やや乾燥気味の所が好きらしい。根は大きな塊になって葉が放射状に延びる。この葉は栄養葉で繁殖用の孢子葉は株の真ん中からのびる。シシガシラとは獅子舞のシシのカシラを連想したものであるろう。



シャシャンボ（さしぶのき）つつじ科 *Vaccinium bracteatum*

五の郭に多い。乾燥気味の疎林を好む常緑の亜高木または低木である。直径15～25 cmくらいになり高さは5～8 mくらい、肌は皮がはがれやすく赤褐色である。葉は短い柄があり長さ4～6 cmくらい、表面に艶があり縁に小さな鋸歯がある。初夏に葉のつけ根から花枝を出し白い壺状の小花をつける。実は5 mmほどで黒紫色に熟す。甘すっぱく食べられる。鳥が好んで食べる。シャシャンボは「小小ん坊」の意味である。



シュンラン（ほくろ） らん科 *Cymbidium virescens*

北山一帯に沢山あったが殆んど盗掘されてしまった。日当たりのよい疎林に生える常緑の多年草である。広い線形の葉は長さ20～30cm、早春に葉の間から花茎を伸ばし1個の花をつける。花弁は普通薄緑であるが、色変わりの花が咲くことがあるので、これを期待して、盗掘が絶えない。花は塩漬けにして茶のように飲むことができる（らん湯）。



ショウジョウバカマ ゆり科 *Heloniopsis japonica*

山道のスギ林の下の湿った所に生えている常緑の多年草で、茎は短く、葉は地面に広がって、ロゼット状になり、時に、古い葉の先に苗ができて繁殖する。ササの葉のような形で先はとがり、柔らかい。長さは10～15cm。春、新しい葉が出る前に、株の真ん中から10～17cmの花茎を伸ばして先に3～4個の淡紅色の花をつける。花が終わると茎はさらに伸び、30～40cmくらいになり、実を結ぶ。花の色は白から紫までである。名前の「猩々袴」の意味ははっきりしない。



シロダモ（しろたぶ、たまがら）くすのき科 *Litsea glauca*

内部川の左岸、城山の裾や山道にあり本数は多くない。高さは10mくらいになる。幹は黒灰色、小枝は緑色で柄のある葉が互生する。葉は表が緑色、裏は白色で3本の主脈が目立つ。長さは柄を入れて15cmくらい。秋に枝先の葉のつけ根に黄色の花が群がってつき、実は翌年の秋に赤く熟し楕円形で長さは15mmくらい。日本名のシロダモは葉の裏が白いからであろう。



ジャノヒゲ（りゅうのひげ） ゆり科 *Ophiopogon Japonicus*

山道にあるが数は多くない。木陰でも育つ常緑の多年草で多数の線形の葉をつけ、初夏に葉の間から短い花茎を伸ばし、薄紫の小さな花をつける。直径5～6mmの実は熟すと瑠璃色になるが、実と呼んでいるのは種子で、子どもたちは「じゃのひげ鉄砲」の弾にする。「りゅうのひげ」というのも葉の形からである。



スイカズラ（にんどう） すいかずら科 *Lonicera japonica*

林の周りを覆うマント群落の仲間で、常緑のツル植物である。葉は短い柄があり楕円形で長さ4～5cm、対生である。葉は冬も落ちないので「忍冬」と呼ばれる。初夏に葉のつけ根によい匂いの筒状の花が2個並んで咲き、咲き始めは白か薄紅、のちに黄色に変わる。花卉の中に蜜があり、それを吸うからスイカズラと名がついた。



スイバ（すかんぼ） たで科 *Rumex Acetosa*

山裾の道端に普通にある多年生の草で茎は50～70cmにもなり中空、表面に稜があり緑色で赤みを帯びる。葉の根元は矢じり型で、上の方の葉は茎を抱く。春から夏にかけて茎の先に花が群がって咲く。葉や茎をかじると酸っぱいので「すかんぼ」という。



スギ（杉） すぎ科 *Cryptomeria Japonica*

日本の特産で九州、四国、本州に自生し、また植林されている。城跡へ登る途中の湿地の辺りに直径20～40cmの樹が30数本あり、境界に植えられたものだという。樹皮は縦に細かく割れ目が入り真っ直ぐに伸びる。幹は割りやすく、大昔から建築材や道具を作るのに使われた。葉は小枝の先に鎌状につき、3月頃枝先に沢山の雄花をつけ、風で花粉を飛ばすので花粉症の原因になっている。



ススキ（かや） いね科 *Miscanthus sinensis*

林縁や草原に生える大型の草で、1.5mを超え、大きな株になる。長く伸びた葉には小さな鋸歯があり固くて鋭い。子どもの頃この葉でよく手を切った。昔から屋根葺きの材料として使われ、山の斜面を広い「萱場」として毎年火入れをして大切にまもっているところがある。ススキの花は「尾花」といって中秋の名月にかざる。



ススカカンアオイ

うまのすずくさ科 *Heterotropa*

nipponica var *brachy-rigescens*

林下にひっそりと咲いている地味な花である。カンアオイの変種とされ、草丈は10cm以下、葉は卵型で模様がある。花はえび茶色で萼片が萼筒より長い。三重、愛知、岐阜に分布する。繁殖力が弱く分布範囲が広がらないので、各地方にそれぞれの地名がついたカンアオイがある。



センニンソウ

きんぼうげ科 *Clematis paniculata*

林縁の日当たりのよいところに生える多年生のツル植物で、葉は対生、奇数複葉で濃い緑色に薄く白みがかった模様がある。夏の終わり頃に白い小花が群がって咲き、秋に長く伸びた雌蕊は白い髭のようになる。有毒植物である。白い髭状の雌蕊を仙人の髭に見立てたものである。



センリョウ

せんりょう科 *Chloranthus glaber*

山道に1株ある。茎は緑色で節がふくらぎ、高さは50～80cmくらい。葉は対生で柔らかく鋸歯がある。夏、茎の頂に穂になった黄緑色の小さい花をつける。花後小さな丸い実ができ、冬に赤く熟す。花の無い季節に緑の葉と赤い実の対比が美しいので正月の花として飾られる。門松にも使う。



ゼンマイ

ぜんまい科 *Osmunda japonica*

山道のスギ林に少しある。湿り気のあるところを好むシダ植物で、地上部は冬に枯れる。孢子葉が先に出、続いて栄養葉が出る。両方とも葉柄がくるくると巻いて綿毛をかぶって出てくる。栄養葉は乾して食べる。

時計のゼンマイは若葉の葉柄がくるくると巻くところを連想したものであろう。



ソヨゴ（ふくらしば） もちのき科 *Ilex pedunculosa*

日当たりのよい乾燥気味のところを好む常緑の亜高木または低木で、八の郭のものは高さ4 mくらいで肌は灰色。葉は互生、長い柄があり楕円形で、先は尖り艶がある。葉のつけ根から長い柄のある雌花が一つ咲く。雌雄別の木で、雄花はかたまつて咲く。実は熟すと赤くなる。ソヨゴの名は、堅い葉が風にそよいでざわざわと鳴るところからつけられたという。



タカノツメ（いものき） うこぎ科 *Evodiopanax innovans*

八の郭に数本ある落葉亜高木で肌は灰色、高さ5～8 mくらい。葉は互生で、短枝の先に集まってつき、3枚に分かれ黄葉する。夏に枝先から花軸を伸ばし白い小花が集まって咲く。実は黒く熟す。冬芽の形がタカノツメに似ているのでこの名が付き、材が芋のように柔らかいので「いものき」と呼ばれる。



タブノキ（いぬぐす） くすのき科 *Machilus Thunbergii*

登り口に直径1 mほどの大木があり各郭にも20～50 cmくらいの木が多数ある。暖かいところを好む常緑高木で肌は灰色で小さなブツがある。葉は互生で枝先に集まってつき、表面は濃い緑で艶があり、裏は青白色。5月ごろに枝先に、白い小花がかたまつて咲き、直径1 cmくらいの実がなり7月に黒く熟す。タブの意味は不明、「いぬぐす」はクスノキに似ているが材質が劣ることから名づけられた。



チャ つばき科 *Thea sinensis*

二の郭や空堀、帯郭にある。城が使われていたころ植えられたのだろうか。常緑低木で葉は互生表面に艶があり、形は楕円形。秋に白い花が咲き、実は次の年の秋に実る。芽出しの若葉を摘んで製茶をするため、各地で栽培されている。茶は中国よりの伝来といわれている。



ツブラジイ （こじい） ぶな科 *Shiia cuspidata*

四の郭の下の谷に直径30～60cmの木が20本あまりある。常緑高木で木肌は青味を帯びた灰黒色で滑らか、高さは20mに達する。葉は互生で柄があり長さ5～7cm、やや艶があり裏は褐色を帯びている。5月に新枝のつけ根から長い穂状の雄花をつけ梢全体が金色に見える。実は8mm～1cmくらい、丸いのでツブラジイという。翌年の秋に熟すと実は黒くなる。渋抜きをしなくても食べることができるが小さいので手間がかかる。



ナラガシワ ぶな科 *Quercus aliena*

一の郭に直径25cmくらいの樹がある。落葉広葉樹で樹皮は灰色で固くて不規則な裂け目がある。葉は互生、柄があり長さは12～18cmくらいで周りに大型の鋸歯がある。新葉とともに花が咲き、雄花は房になって垂れさがる。実は楕円形で2cm、お椀は鱗状の模様がある。実はその年の秋に実る。



ヌルデ （ふしのき） うるし科 *Rhus javanica*

林縁に数本ある落葉小低木で、幹は灰褐色、枝はまばらに出る。葉は奇数羽状複葉で大きい。中軸の葉の間にヒレがある。夏に房のようになった小さな花が咲く。葉に寄生する「ヌルデノフシムシ」の虫こぶから「フシ（五倍子）」が採れる。「フシ」は染料や薬の原料になる。また、樹液を漆と同じように塗り物にも使うことができる。秋の紅葉が美しい。さわると、かぶれるので注意すること。



ネザサ いね科 *Pleioblastus variegatus*

城跡を含め北山全体にある常緑のササで、静岡県より西に分布する。地上部を頻りに刈り取られると高さ3～5cm、葉の長さも2、3cmの小型になってしまい、刈り取られないと高さ2～3mにもなり別の植物かと思う。畑の堆肥や農家の燃料に毎年刈り取られたが、今は刈り取られることもないので2mを超す藪になっているところもある。葉の裏や節に毛のあるのを「ケネザサ」という。城跡に多い。



ネジキ （かしおしみ） つつじ科 *Lyonia Nieziki*

四、八の郭にある落葉亜高木で灰褐色の肌にねじれたひび割れがある。幹にねじれたような模様があるのでネジキという。新枝は葉とともに赤いので「ヌリバシ」ともいう。葉は互生し楕円形で先はとがり、長さ6～10cm、6月に前の年の枝に白い壺状の花が房になって咲く。



ネスミモチ （たまつばき） もくせい科 *Ligustrum Japonicum*

城跡に多い常緑の低木で高さは4～5m、肌は灰色である。葉は対生、柄があり楕円形で少し艶がある。6月に新枝の先に白い小花がかたまつて咲く。実は楕円形で黒く熟し、ネズミの糞のように見えるから「ネズミモチ」という。



ネムノキ （こうかぎ） まめ科 *Albizia Julibrissin*

二の郭にある、落葉亜高木で川の土手など湿った所が好きな木である。幹は灰色で、葉は柄があり互生、2回羽状複葉（鳥の羽のように小さな葉が並んでつく）。6月ごろ小枝の先から小さな花軸が出、桃色のボタン刷毛のような花が咲く。秋に、鞘のなかに平たい種が並んだ実がなる。ネムノキは、夜、小葉が閉じて眠るので「ネムノキ」という。



ノイバラ （のばら） ばら科 *Rosa multiflora*

林の周りがあるが、川原でもよく茂っている。落葉低木で、よく枝分かれして藪のようになる。枝は根元が灰褐色、先は緑色で棘が多い。葉は奇数羽状複葉。初夏に2cmくらいの白い花が群がって咲きよい匂いがする。花後7～8mmの実がなり、赤く熟して、冬、葉が落ちてからも残る。



<p>ノキシノブ（やつめらん） うらぼし科 <i>Polypodium Thunbergianum</i></p> <p>登り口のタブノキにもついている常緑のシダ植物で、樹の幹や岩の上に育つ。葉は線形で長さは10～20cmほど、裏に茶色の胞子が2列に並ぶ。古くなった茅葺屋根によくつくのでノキシノブという。</p>	
<p>ノダフジ （ふじ） まめ科 <i>Wistaria floribunda</i></p> <p>登り口の近くに直径8cmにもなる木がある。落葉のツル植物で他の木に巻きついて高いところまで登る。幹は灰色で多少凸凹がある。葉は互生、奇数羽状複葉、初夏に藤色の房になった花が咲く。堅い鞘に入った種は晩秋に鞘が開いて飛び散る。庭園に植えられるフジは改良されて長い花房になるものがある。ツルは右巻きである。</p>	
<p>ハチク（くれたけ） いね科 <i>Phyllostachys nigra</i></p> <p>波木南台4号公園横にある。中国渡来のタケの仲間で常緑多年生、稈は直径3～10cm、高さは10mになる。各節から枝が出てよく枝分かれする。節は2重で葉は先のとがった披針形である。筍の皮は淡い紅色で肩毛は45度につく。マダケより繊維が細く細工物に適する。筍は癖がなくて美味しい。「淡竹」と書く。</p>	
<p>ハラン ゆり科 <i>Aspidistra elatior</i></p> <p>林の周囲にある常緑の草本で、地下茎から所どころ大きな葉を伸ばす。真ん中に主脈があり、支脈は左右不相称である。11月ころ地下茎から小さな花茎が伸びる。日本名は葉蘭で、食べ物の仕切りやおにぎりを包むのに使ったが今は殆んど使われることはない。</p>	

ハンノキ（はりのき） かばのき科 *Alnus Japonica*

林の周りがある。湿った所が好きな落葉亜高木で、高さは10mくらい。肌は灰褐色でざらついている。葉は互生、柄があり、縁に鋸歯がある。4月、葉が伸びる前に小枝に雄花が垂れ下がり、雌花は枝の中ほどに2～3個つく。昔から球果を染料に使った。ハンノキの語源は不明。



ヒイラギ（疼木） もくせい科 *Osmanthus ilicifolius*

空堀に僅かにある。常緑広葉樹低木である。幹は灰色、葉は対生で卵型長さ4～6cm、柄は短く縁に6～7本の鋭い棘がある。この棘は、老木になると無くなり葉先のトゲのみ残る。12月に白い小花が咲き、楕円形の実がなる。実は黒く熟す。日本名のヒイラギは、「疼木」で葉のトゲに触ると痛いからである。



ヒガンバナ（まんじゅしゃげ）ひがんばんな科 *Lycoris Radiate*

城山の下道の端にある。人里や田の畔などどこにでもある草で、その生活は少し変わっている。9月に球根から30cmくらいの花茎をだし、その先に真っ赤な6弁の花を数個つける。花が終わると間もなく濃い緑の葉が伸び、そのまま寒い冬を越し、3月に枯れる。ヒガンバナほど方言の多い植物は珍しく、「日本植物方言集」によると414種ある。



ヒサカキ つばき科 *Eurya Japonica*

どの郭にもあるが乾燥気味の所を好む。常緑低木で幹は灰褐色、肌はなめらかである。葉は柄があり、厚手、光沢があり、鋸歯がある。春に葉のつけ根に小さな壺状の花がかたまって咲く。雌花、雄花、両生花があり、つく株がそれぞれ違う。ヒサカキは、「姫サカキ」の訛りである。



<p>ヒノキ ひのき科 <i>Chamaecyparis obtusa</i></p> <p>三の郭にあるヒノキの切り株は直径34cm、樹齢60～64年、生えていた位置から考えると実生であろう。八の郭のように地境の目印として植えられたものもあるが、郭の法面など乾燥したところに生えている常緑の針葉樹で、幹は灰褐色、樹皮は厚く縦に荒い裂け目がある。枝先は緑で扁平な細かい葉がある。木材として利用価値が高いので一般的に多く植林されている。大昔から火を起こすときに使った。</p>	
<p>ヒヨドリジョウゴ なす科 <i>Solanum lyratum</i></p> <p>山裾の道端にあるツル性の多年草で前年の古いツルから新しいツルを出して伸びる。葉は下の葉と先の葉で形が違ふ。夏から秋にかけて、葉と対生に花茎を伸ばし、白い花をつける。花後に8mmくらいの実がなり赤く熟す。ヒヨドリがこの実を好んで食べるからヒヨドリジョウゴといわれる。有毒植物である。</p>	
<p>ヒヨドリバナ きく科 <i>Eupatorium Japonicum</i></p> <p>登り口の上の空き地や林の周りがある。多年草でフジバカマに似ているが、葉は単葉で鋸歯がある。8～9月頃汚れたような白い花がかたまって咲く。アサギマダラはこの花が好きで上空を飛んでいても舞い降りてくるといふ。ヒヨドリバナとはヒヨドリの鳴く頃に咲くからだといふ。</p>	
<p>フモトシダ うらぼし科 <i>Microlepia marginata</i></p> <p>登り口の横にある常緑のシダ植物で、照葉樹林の林床でもよく育つ。「ハンゴシダ」と間違えやすいが胞子のつき方が違ふ。</p>	

<p>フユイチゴ (かんいちご) ばら科 <i>Rubus Buerderi</i> 林床や林の周りにある。常緑のツル植物で柄のある五角形の葉が互生する。夏に白い花をつけ、実は冬に赤く熟し食べられる。</p>	
<p>ヘクソカズラ (やいとばな) あかね科 <i>Paederaria scandens</i> 林の周りのマント群落の仲間、多年生のツル植物である。他の草や樹に巻きついてツルが伸びる。葉は対生で楕円形、先が尖る。6～7月ごろ、外が白、中が赤い釣鐘状の花が咲き子どもは手の甲や鼻の先にこの花をつけて遊ぶ。実は茶色に熟す。植物採集の時、お母さんは3度顔をしかめるといふ。初めは名前のヘクソカズラで、2度目はニオイ、3度目は押し葉にすると葉が黒くなるからである。</p>	
<p>ベニシダ うらぼし科 <i>Dryopteris erythrosora</i> 谷間の湿ったところに生える常緑のシダ植物である。4月の芽吹きの時、ベニシダの新芽は紅い葉を伸ばすので他のシダと区別ができる。しかし成長すると緑になる。牧野図鑑では科名が「うらぼし科」になっているが他の図鑑では「おしだ科」になっている。</p>	
<p>ホツツジ つつじ科 <i>Tripetaleia Paniculata</i> 四の郭に数本あるつつじ科の低木。肌は灰褐色でざらついていて葉は短い柄があり互生。7～8月に枝先に白い穂状の花をつける。つつじの仲間では花期が一番遅い。他に「山わら」、「山ほうき」と呼ぶこともある。良く枝分かれするので、箒にすることもある。</p>	

マダケ （にがたけ） いね科 *Phyllostachys bambusoides*

山麓の川沿いに2群ある。日本では普通に見られる竹で稈の太さは2～15cmくらいで高さは20mに達するものもある。節は2重、枝は各節から2本出て、第1節に小さな穴がある。筍は5～6月に出て成長は早く40日くらいで伸び切り、その後は太さも高さも変わらない。竹の皮に黒褐色の模様があり、肩毛は直角に出る。稈は固くて弾力があり建築材や各種器具、竹かごなどに使う。筍に苦味があるので「にがたけ」という。



マンリョウ やぶこうじ科 *Ardisia crenata*

一、三、四、八の郭に数本ある。常緑の低木で、高さは50cmくらい。葉は長楕円形で先は尖る。縁に鋸歯があり、艶がある。夏に枝先に小さな白い花をつけ、実は熟すと赤くなり垂れ下がる。冬も緑の葉と赤い実の対比が美しいので庭に植えられる。



ミツバアケビ あけび科 *Akebia trifoliata*

林縁に多いツル性の落葉植物で幹は灰色、他の木に巻きついて高く伸びる。葉は長い柄があり3枚複葉である。4月ころ葉のつけ根から長い花軸を伸ばし先に黒紫の雄花が、その下に大きな雌花を2～3個つける。実は厚い皮があって熟すと紫色になり2つに割れて中の白い果肉が現れる。中には黒い小さな種が詰まっています、果肉は甘いので食べられる。



モチノキ もちのき科 *Ilex integra*

一、八の郭にあるが数は少ない。西日本に多い常緑亜高木で幹は灰色、葉は柄があり互生、厚くて艶があり鋸歯はない。雄花は4月ころ葉のつけ根に黄緑色の小さな花がかたまつて咲き、雌雄別株である。実は赤く熟し秋から冬にかけて鳥のエサになる。木の皮から「鳥もち」を作る。



<p>ヤエムグラ あかね科 <i>Galium Aparine</i></p> <p>道端や山裾に盛大に茂る1～2年生の草で、他の草や樹に寄りかかって60～90cmの高さまで伸びる。茎は4角、節から3～4cmの葉（じつは2枚が正規の葉で他は葉のような托葉）を輪生する。葉のつけ根から花茎を伸ばし薄黄緑色の小さな花をつける。茎にも葉にも小さな棘があるのでざらつく。子どもは輪生した葉をとって胸につけ「勲章」と言って遊んだ。</p>	
<p>ヤブコウジ やぶこうじ科 <i>Ardisia japonica</i></p> <p>四、八の郭にあり日当たりのよい林床を好む常緑の小型の木である。地下茎を伸ばして拡がり、茎は直立し10～15cmくらいで葉が4枚輪生する。葉のつけ根から花茎を伸ばし、2～3個の小さな花をつけ、実は赤く熟す。形が可愛らしいので庭に植えられ、正月の飾りにも使われる。</p>	
<p>ヤブツバキ つばき科 <i>Camellia Japonica</i></p> <p>四の郭で見つけたが、常緑広葉樹の代表みたいな木なのになぜか城跡には見当たらない。幹は灰白色、肌は滑らか、葉は互生で厚く艶があり小さな鋸歯がある。新枝の先に赤い大きな花をつける。花弁は5枚で根元はつながっている。雄蕊は多数で基はつながって筒のようになっている。メジロが蜜を吸うために頭を突っ込み、花粉で頭が黄色くなる。自生のものをヤブツバキといい、沢山の園芸品種がある。</p>	
<p>ヤブニッケイ くすのき科 <i>Cinnamomum japonicum</i></p> <p>城跡には割合に多い常緑亜高木で、幹は黒灰色、白い斑点がある。葉は柄があり対生、楕円形で鋸歯はなく表面は艶がある。6月に葉のつけ根から花茎を出し薄黄色の小さな花が咲く。小豆粒くらいの実は11月に黒く熟す。僅かにニッキの香りがする。やぶに生えるニッキ、野生のニッキという意味であろう。</p>	

<p>ヤブラン ゆり科 <i>Liriope graminifolia</i></p> <p>樹林の下でもよく育つ常緑の草で、ヤブランと呼ばれるがユリの仲間である。葉は線形で根元から叢生する。真ん中から40～50cmの花茎を伸ばし3～5個の花が何段もつく。5～6mmの実は始めは緑色で、のちに黒くなる。</p>	
<p>ヤマウルシ うるし科 <i>Rhus Trichocarpa</i></p> <p>林縁に若い木があるが数は少ない。落葉亜高木でヤマハゼに似ているが葉の幅が広く若い木では葉に鋸歯がある。幹は灰褐色で枝はまばらに出る。ヤマウルシは野生の漆で触るとかぶれるので「かぶれのき」と言って敬遠されるが秋の紅葉は美しい。「ウルシ」は漆液を採るため東北日本で栽培されているが中国原産といわれている。</p>	
<p>ヤマザクラ ばら科 <i>Prunus Donarium</i></p> <p>五の郭に直径70cmの大木がある。西日本に多い落葉高木で吉野山の桜は有名である。黒褐色で横に皮目がある。葉は柄があり互生、楕円形で先が尖り鋸歯がある。3～4月に花とともに若葉が伸び、紅色の若葉と花の対比が美しい。実は小豆粒くらいで黒く熟す。小鳥が好んで食べるが苦い。庭園樹としては「ソメイヨシノ」が多いが、桜色の花と若葉の色が美しいとあって、公園や庭園に植えられることも多い。建築材や版木になる。</p>	
<p>ヤマツツジ つつじ科 <i>Rhododendron Kaempferi</i></p> <p>一、八の郭で見かけるツツジ科の低木で枝は細かく分かれ地を這うように広がる。葉は互生で枝先に集まってつき、狭い卵型で先は尖る。枝にも葉にも細かな毛がある。5月に赤または朱色の花が咲く。花弁はじょうご型で先が5つに分かれる。</p>	

ヤマノイモ（じねんじょう） やまのいも科 *Dioscorea japonica*

林縁に生えるツル植物で、地上部は冬枯れる。紫がかったツルを伸ばし他の草や樹に巻きついて高く伸びる。葉は長い柄があり長楕円形で先は尖る。雌雄別株で夏に葉のつけ根から穂状の白い花をつけ、雌花はのちに3枚の膜のようなヒレがある種になる。葉のつけ根にはムカゴができ食べられる。地下の根は年々太くなり食用になる。



ヤマハゼ（はにし） うるし科 *Khus silvestris*

幾つかの郭や林縁にある落葉亜高木で幹は灰色、細かいひび割れがある。枝はまばらに出て、葉は羽状奇数複葉、秋の紅葉が美しい。雌雄別株で、5～6月頃房になった小さな花が咲く。実はゆがんだ卵型で、きたない黄色、表面はすべすべしていて、お手玉に入れたりした。この木の樹液は触れるとかぶれる。この木に似た、ハゼノキは西南日本に多く、実から木蠟を採る。



リョウブ りょうぶ科 *Clethra barbinervis*

四の郭に数本ある落葉亜高木で7mくらいになる。肌は滑らかで成長に従って、皮がはがれて落ちる。肌が滑らかなので「サルスベリ」と間違えることがある。皮がはがれた直後には木肌が薄緑色のことがある、葉は柄があり互生、枝先に集まってつき狭い卵型、先は尖る。6月に枝先に穂状の小さい白い花が集まってつく。材は良質の木炭の材料で、若芽は食べることができる。



6. 自然観察のしかた

野や山へ行って、植物や動物などをみるだけが自然観察ではない。生えている植物・住んでいる動物から何かを教わること。それから何かを学びとることが自然観察である。いいかえれば自然観察は「自然から学べ」という人間のはたらきである。自然観察をするには、ふつう、次の順序で進められる。

観察 → 記録 → まとめ → 反省

(1) 観察のしかた

観察はただ目から見るだけではない。香りをかぐ・味を味わう・手で触ってみてかたい、やわらかい、なめらか、ざらつくなど五感を働かせて、その物の性質を調べたり、4枚あるとか、6本あるというように数えたり、重さをはかったり、長さをはかることも観察である。観察には、一般に次のような心構えが必要である。しかし、植物の中には、ヤマウルシ、ヤマハゼ、ヌルデなど、かぶれるものや、毒のあるものもあるので、不用意に触ったり、口に入れたりしてはいけない。

① 何を観察するか

ばく然と城跡を歩いていたのでは自然から学び得ることは、きわめて少ない。何を観察するか、観察の目的事項を明らかにしておくことが大切である。

② 観察の方法をきめる

観察の方法が間違っていたのでは、いかに多くの観察をしても正しい答は得られない。たとえば、アカメガシワの芽が伸びていく様子を観察するとき、「定めた芽を毎日観察して実物大に写生する」「芽の直径と長さを毎日をはかる」「芽を一週間ごとに一つずつとって、1つ1つ解剖して、各部分を写生する」といったようなことである。

③ 観察する際の心構え

観察には自然のありのままを、その通りにゆがめずに観察することを根本として、正しく、詳しく、明らかにするよう心がけなければならない。そのために特に大事なことは「あなるはずだ」「こうなるはずだ」というように先入観により自然をゆがめてみることのないようにすることである。

(2) 記録のとり方

観察したことは、そのまま記録しなければならない。記録をとらない自然観察は価値がない。ただ観察したままでは、どんなに記憶力のすぐれた人でも観察したままを記憶しておくことは不可能に近い。それに記憶は主観的な要素が強く、自然をゆがめて自己中心的な解釈におちいりやすい。だから、観察したことを記録にとる習慣は大切なことである。また、観察したことを記録にとるようにすると観察がていねいになり、正しく観察するようになる。正しく、詳しく、明らかに記録するために次のようなことが大切である。

① その場で記録する

観察したことはそのたびごとに、その場で記録することが大切である。おぼえていて後で記録するということはよくない。観察したその場で観察したままを記録する。

② 観察ノート

観察には観察ノートを準備しておく。いろいろなノートに書いたり、ありあわせの紙片に書いておいて、後で写しとることはよくない。必ず一定の観察ノートに記入する習慣をつけなければならない。ノートがきたなくなるから他のノートや紙片に書いておいて清書することがあるが、紙片は失うことがありノートにしても写し誤りがありがちである。ノートは美しいものを望むものでなく正しいものが望ましい。

③ 記録の注意

記録が簡単すぎると後になって何の役にもたたないことがある。また誤って書いては、それから導かれた結論が誤りであることはいうまでもない。したがって、記録は「くわしく、正しく」をモットーにしなければならない。自然観察には必ず次のことを記録しておく。

1. 観察日時 2. 天気・気温 3. 観察者 4. 場所

また、観察ノートを見ると、しばしば「前日に同じ」とか「あとかわりなし」などというのがある。これは是非さけない。記録は観察したままのものでなければいけない。前日がどうであろうと、今、観察したままを記録しなければならない。

(3) 考察のしかた

植物や動物の生活をどんなに多く正しく観察し、その1つ1つをどんなにでいねいに記録しても、その記録をただ大事にとっておくだけでは観察の意味がうすれる。いかに多くの自然観察の記録を積み重ねてもそれだけでは自然から学ぶ面は極めて少ないということである。1つの観察が終わったならば、観察の記録を整理し、そこに横たわっている筋道を見出したり、あるいは今までの知識と比較して判断し、その観察からどんなことがわかるか考えてみる必要がある。

① 観察のしかた

一般的には観察の場合では、次のような順で処理する。

1. 観察記録を何回も何回も通覧する。
2. 内容をいくつかに分類する。
3. 分類した各課目ごとに全記録から数表や図表などを作る。
4. グラフに表し得るものはグラフを作る。
5. 数表や図表をよくみて判断し、それからどのようなことがわかるか、わかったことを書き出しておく。

② 参考書や他の観察（研究）との比較

観察方法や引き出した結論を参考書や過去になされた研究と比較し、その正否を判断することも必要である。

(4) 反省のしかた

観察について、次のようなことを常に冷静に反省し、記録にしておくことが必要である。

- ① 観察方法が適当であったかどうか
- ② 観察中に起こった疑問
- ③ 将来研究してみたい問題
- ④ 観察中に生じた障害
- ⑤ その他、感じたこと

(5) 観察のための道具と服装

基本的にはノートと鉛筆だけ。

服装は、歩きやすい靴（サンダルは不可）と長袖のシャツ、長ズボン、帽子、軍手。軽い服装が良いが、季節によって、セーターを加える。レインコートや長靴がいるときもある。水筒やタオルも忘れないように。

持ち物は、野帳（フィールドノート）、鉛筆、ルーペ、双眼鏡、カメラ、剪定ハサミ、根掘り、ポリ袋、新聞紙、植物図鑑、巻尺、物差しなど。

アカメガシワの観察

（内部川沿い道路の、采女城跡入口までの山側ガードレール際に多数自生している。）

- 1. 4月のはじめ、枝の先から毛の生えた赤い新芽が出る。・・・①
- 2. 5月ごろになると、早く出た葉は大きく緑色になって毛が取れていく。・・・②
- 3. 6月ごろ、中心に淡黄色の細かい花が盛り上がり咲く。・・・③

雌雄別株で花の形が違う。

①



②



③



- 4. 昔、この葉に食べ物を載せたので「サイモリバ（菜盛り葉）」ともいわれる。成長した葉は、どのくらいの大きさになるか観察しよう。

< 参考資料・文献 >

牧野新日本植物図鑑	著者	牧野富太郎	発行所	北隆館
原色樹木大図鑑	監修	林 弥栄、中里和夫、中村 恒雄	発行所	北隆館
日本の野生植物	監修	佐竹 義輔、大井 次三郎、富成忠夫	発行所	平凡社
原色日本植物図鑑	著者	北村 四朗、村田 源	発行所	保育社
三重県のシダ植物	著者	三重シダの会	発行所	三重県良書出版会
四日市市の植生と植物相	著者	四日市市自然環境保全現況調査グループ	発行所	四日市市
写真でわかるシダ植物	著者	池端 怜伸	発行所	トンボ出版
竹、笹の話	著者	室井 綽	発行所	北隆館
植物の名小辞典	著者	清水 清	発行所	誠文堂新光社
身近な植物観察のポイント	著者	浜嶋 繁隆、中西 正、川上 昭吾、会津 友美	発行所	トンボ出版
植物百話	著者	矢頭 献一	発行所	朝日新聞社
三重の樹木	著者	第31回全国植樹祭実行委員会	発行所	三重県、大阪営林局

< お世話になった方々 >

監修	四日市自然保護推進委員会	桐生 定巳
文書編集支援	うつべ町かど博物館	有竹 正雄

< 編集委員 >

采女城跡保存会	会長	堀 保
采女城跡保存会	副会長	若林 修三
采女城跡保存会	書記	古市 和文
采女城跡保存会		鈴木 公子
采女城跡保存会		東川 日出夫
采女城跡保存会		福島 廣
采女城跡保存会		古市 敬子

お願い

采女城跡の領域における植物について、植物の保護の観点から採取することを禁じます

采女城跡の植物

2015年 5月初版発行

編集・発行	采女城跡保存会
(発行代表者)	堀 保
(連絡先・住所)	内部地区団体事務局 四日市市采女町857番地1
印刷・製本	東海出版有限会社 四日市市日永4丁目5-48

